

幼児期の表現行動における身体性に関する研究

-上下する身体-

○佐藤哲也・横川和章・名須川知子
(兵庫教育大学)

【はじめに】

意識と行動とが十分に分化していない幼児の活動には、その子どもの意志や内的指向性が直接反映していると思われる。こうした観点から、我々は幼児の表現行動における身体性（身体の方角・運動・関係等）に着目し、そこから幼児の内面を読みとろうとしてきた。

過去の研究では、遊具を介した母親との関係を分析したもの（50回大会）、幼児同志が向かい合うことで成立する空間の共有（51回大会）等、主として幼児の身体の高さを基点にその移動性・方向性・距離・関係性等に着目してきた。いずれの結果から、身体の高さに幼児の内的指向性が反映していることが明らかにされた。

今回の報告では視点を変えて、身体の高さというベクトルから上述の仮説を検証していく。つまり、新しい機軸・観点から幼児の表現行動を分析し、そこに表れた内面性を考察することを目的としている。幼児の表現性・活動性の指標として身体の高さ運動が示唆するもの、あるいはそうした表現行動の人間学的意味について、検討を進めていきたいと思う。

【方法】

対象児：A児（男児4歳1ヶ月）・B児（男児4歳0ヶ月）。原則として2週間に一回約一時間、遊戯室でそれぞれの母親と合計4人で自由に遊んでいる。遊戯室を訪れるようになって6ヶ月が経過した。

観察手続き：2名の幼児とその母親たちに、遊戯室で自由に遊んでもらった。その様子を4台のビデオカメラで撮影した。可能な限り自然な状況で観察を行うため、遊戯室内には2組の親子以外は立ち入らず、母親に対しては、子どもとともに遊戯室に一緒にいてもらうことのみを教示し、その他の要請は行わなかった。

分析手続き：観察開始からA児・B児の活動に顕著な違いが見られた10分間を分析対象とした。録画をもとに、観察記録を作成した後、身体が上下に運動をしている場面を抽出した。そしてそれらの活動が生起する脈絡についても記述するとともに、その頻度を数え

た。分析対象となった場面は、A児145場面、B児16場面である。

【結果と考察】

A児とB児の活動には著しい違いが見られた。A児は遊戯室に入るやいなや、大型積木やボールを使って体全体を使って遊びはじめた。母親との関わりを求める行動もたびたびあった。一方、B児は周囲を見回す探索行動の後、おもちゃ置き場のミニカーで一人遊びを始めた。これら2人の活動を身体の高さ運動の観点から整理すると次のようになる。このデータは、二人の表現活動の差異を如実に反映している。

＜制止状態＞

- ①立ち続ける（A児：0回、B児：3回）
- ②座り続ける（A児：0回、B児：2回）
- ③突っ伏す（A児：0回、B児：1回）

＜運動を伴う動作＞

- ④座る（A児：3回、B児：4回）
- ⑤立ち上がる（A児：5回、B児：4回）
- ⑥飛び上がる（A児：2回、B児：0回）
- ⑦上下する（A児：4回、B児：0回）
- ⑧登る（A児：7回、B児：0回）
- ⑨降りる（A児：6回、B児：0回）

＜物を介する動作＞

- ⑩拾い上げる（A児：52回、B児：0回）
- ⑪高く掲げる（A児：4回、B児：1回）
- ⑫置く（A児：16回、B児：1回）
- ⑬積み上げる（A児：29回、B児：0回）
- ⑭叩き付ける（A児：4回、B児：0回）
- ⑮投げる（A児：14回、B児：0回）

【⑩拾い上げる】

身体運動を活発に展開し、物と人との関わりを積極的に求めていったA児の活動には、身体を上下させる表現行動が顕著であった。例えば、「⑩拾い上げる」行動が突出していたことを挙ることができる。これは、A児が「ボールを拾い上げて投げる」「積木を拾い上

げて積み上げる」遊びを繰り返したことに起因している。環境設定の問題を等閑視できないが、幼児が物を介して表現行動をしようとするとき、必ずくそれを手に取り（拾い）＜く自らの感覚器官（大抵の場合は目で）で確認し＞＜保有・所有するために抱え込む、あるいは握りしめる＞一連の動作を伴うことをA児の行動は物語っている。こうした動作の端緒となるのが「拾い上げる」上下運動に他ならない。この行動は、興味関心のある対象に接近し、関係性を結ぼうとする目的意識を有している。それは、好奇心と積極性という内的要因によって導出された表現行動と解することができよう。

【⑬積み上げる】

「積み上げる」つまり上方に物を重ねていく表現行動もA児の行動を特徴づけるものである。「滑り台に積木やボールを積み上げて、最後に上からすべり降りる」「積木を2段・3段と積み上げてボールをぶつけて崩す」等、特に後者は14回も繰り返された。「積み上げる」た後に、A児は必ずそれを破壊した。最初は単なる思いつきであったのかもしれない。しかし、そこにおもしろさを見出したA児は＜積み上げ＞＜壊す＞活動を繰り返すことになる。この遊びの脈略において、体をかがめて積木をつかみ上げ、腕と体を上方に伸ばして一段一段「積み上げていく」上下運動は、明確な目的性を持った作業なのである。

【⑪高く掲げる】

類似した行動に「⑪高く掲げる」というものがある。これはA児・B児双方に見られた動作の中でも、内的指向性が共通している点で興味深い。「母親に向かってボールを投げるとき、両手に持ったボールを精一杯持ち上げて（高く掲げて）反動をつけようとする」（A児）「“お母さん、これ見て”と言ってミニカーを高く掲げる」（B児）どちらの場合も、母親に対して自分が所有しているものをアピールする、つまりその物（あるいは力）を誇示する一方で、相手の関心を引こうとする意図が表出されている。こうした表現行動には他者とのコミュニケーションを志向する幼児の強い意志が働いていると思われる。

【⑦上下する】

A児の行動に見られた「⑦上下する」運動とは、スキップのことである。「遊戯室に入るやいなやスキップをして積木の方に行く」「スキップしながらボール

をすべり台まで持っていく」（2回）「ボールを持ってはねながら母親の方に行く」スキップするとき、身体は軽かに・リズムカルに上下運動を繰り返す。自分の好きな所（人）のところに行こうとする時の、お気に入りの遊びに移行しようとする際の、高揚感・躍動感が上下運動となって表れている。

【①立ち続ける・②座り続ける・③突っ伏す】

これらはB児の行動を特徴づけるものである。「立ったままA児の活動をじっと見つめる（20秒）」「おもちゃ置き場の前に座り込んでミニカーで遊ぶ（6分6秒）」「ミニカーと同じ位置まで視線を下げていった結果、突っ伏してしまった（20秒）」それぞれ、身体の「高低」といった次元で静止した状態である。①は明らかに遊びのきっかけをつかむことができず、静的に探索している状態である。B児は、周囲の状況に対して距離化をはかっているものと推察できる。一方②・③は、自らの興味の対象に没入し、遊具に固執しながら遊びに集中している。モンテッソーリ女子が指摘した、いわゆる「集中現象(concentration)」と見なすことができよう。B児の身体は静的であるが、その内部では活発な精神活動が展開されていたに違いない。

・

【⑤立ち上がる】

A児・B児共に観察された行動である。「座る」もしくは「突っ伏した」状態から次の行動に移行しようとするとき、あるいは興味の対象を探索・発見しようとするとき、彼らは毅然として「立ち上がる」のである。

おわりに

幼児の「上下する身体」は、見る者に＜活動性＞＜躍動感＞＜高揚感＞を与える。こうした印象が生起する要因として、「上下する身体」が幼児の内面を直接に反映した表現行動であることが挙げられよう。「上下する身体」は、幼児の活動性・自己充実を表出するひとつの指標なのである。

さらに言うならば、天空・神聖なるものへの飛翔を志向して現実を超越しようとする＜上昇体験＞と重力が事物を引きつけることによって宿命的に生じる＜下降体験＞の間の＜緊張関係＞こそが、「上下する身体」に豊かなボディ・イメージを生起させる要因であると解釈できるかもしれない。

※なお、本研究は、科学研究費【基盤研究(C)(2)】「幼児期の表現行動における身体性に関する横断的研究」の一部である。